



消化器病の世界的権威

小野寺直助

小野寺直助は、医学の研究に努め、胃腸病をなおす方法として「小野寺式圧診法」を考案し、「九大（九州大学）に小野寺あり」とその名をとどろかせた人です。「胃運動曲線に関する研究」「圧診法に関する研究」は、医学会不滅の業績とされている。また、一般民間人の診療には診察料をとらない主義を押し通し、「『医は仁術なり』」を実行したまさに医者神さまだと言われた。

小野寺直助は、一八八三年（明治一六年）五月、前沢三沢家の侍医として代々医業を継いだ小野寺与三郎の末子の四男として生まれた。旧制盛岡中学校、第一高等学校を経て、京都帝国大学、福岡医科大学に進んだ。

旧制盛岡中学校時代、直助は数学が全然ダメでしたが、瀬戸虎記（のち旧制一高校長）という数学教師が来てからすっかり変わり、四年に進級の時は学級で一番、五年になると数学の成績がものすごくよく、全校一となって、郷古潔（水沢出身の財界の立役者）と首

席（第一位の席）を争った。この経緯を直助は次のように述べている。

「瀬戸先生がこられて真っ先に黒板の前に立たされ、この問題を解いてみるといわれた。大変だと思ったが、工夫してなんとか解くと、先生は『いいところに気がついた』とほめてくれ、すっかりうれしくなった。冬休みに、前沢の家に帰り、どうしても数学に強くなろうと勉強、これまでは数学も暗記するものだと思っていたが、やってみると普通学科と変わりない。どうしてわからなかったのかと反省したね。自分はダメだと思ったのがいけなかった・・・」と。

旧制盛岡中学校の同期生には、郷古潔（水沢出身・三菱重工社長）や金田一京助（言語学者・文化勲章受章）、野村胡堂（作家）などがいる。

一九一〇年（明治四三年）、直助は福岡大（九大）を卒業すると第一内科助手となり、間もなく内科研究のためにドイツ、オーストリア、イギリスに留学して医学を学んだ。一九一六年（大正五年）に帰国すると、創設したばかりの九州帝国大学医科大学教授となり、消化器関係を専攻した。一九一九年（大正八年）には、アルカロイド製剤の応用による薬効に関する論文で医学博士となる。そしてすぐ中国をはじめマレー、インドのほか各国へ再び研究視察に出

かけた。

一九二八年（昭和三年）には付属病院長となり、一九三二年（昭和七年）別府市に温泉治療医学研究所を開設したため、自ら所長を引き受け、医学部長も兼ねた。

直助博士は九大在職時代から、若い医師に対し「もっと訓練された職業的カンを大切にせよ。」と、医療器具に頼りがちな悪い習慣を改めることを口ぐせとしていた。自ら治療面に応用できることはなんでも研究開発に努め、臨場実験（その場で事実を調べること）に役立てた。一九三三年（昭和八年）、「胃運動曲線照射法」で、恩賜金記念賞（天皇からいたたく賞）を授与され、一躍、第三内科の消化器病に関する権威者となった。「胃運動曲線照射法」とは、患者に管をつけたゴム風船を呑みこませ、これに空気を送りこみ膨らませると、胃の中で風船が胃と全く同じ動きをする。このことを分析すれば胃の運動がわかるという方法である。胃カメラやレントゲンの発達していなかった当時だっただけに大いに役立ち、胃ガンの早期診断ではレントゲンにひけをとらない成果を収めている。胃カイヨウや十二指腸、また胆ノウなどの疾患にも特有の運動曲線分析による診断法を開拓している。

また各消化器疾患の補助診断法として「小野寺式圧診法」を考え、

広く医学会に使用されました。「小野寺式圧診法」は、直助博士があるマツサージ師から聞いた「内臓に病むところがあれば、ある個所を押さえると患者が痛みを訴える。」という話をヒントに研究した結果だといっている。

これを伝え聞いたわが学界をはじめ各国から多くの学生や生徒、研究者や学者が教えを受けに九大を訪れ、弟子入りして「九大に小野寺あり」と全世界にその名をとどろかせた。指で皮膚の表面を押して診察する指圧診察法だけに、直助博士が若い医師に「もっと職業的カンを大切にせよ。」と諭した理由もうなずける。直助博士自身が、その手本を示したのである。

その指圧診察は多くの臨場例（その場でのぞんだ具体的な事（ら）があつてこそものをいう。そこで「何万人もの人を診察した結果だし、そのうえ実験もさせてもらっている。」と言って、特殊な依頼を除き、一般民間人の診療には診察料をとらない主義を押し通した。だから九大付属病院を訪れた九州人からは神と慕われ、その『神』を頼って各地から患者が押し寄せた。

旧制盛岡中学校の同期生だった故金田一京助文学博士は、直助博士を「『医は仁術なり（医学は、すべての人に思いやりと誠実な気持ちを持って、人を救う道である）』を実行したまさに医者（の神）さ

まだ」と評価したが、その通りの人でした。

旧満州から引き揚げ後、久留米医科大学長・同理事長となる。また
がくじゅつかいぎかいいん 学術会議会員・医師実施訓練審議委員を兼ね、この間、四つの病
院の顧問（相談を受ける役職）となった。しかも、たんなる顧問役
だけに満足しないで、週三日でいどの診察に応じた。一九五〇年
（昭和二十五年）に再び久留米大学長、一九五三年（昭和二十八年）に
どうめいよかくちやう 同名誉学長、日本学士院会員となる。

一九六三年（昭和三八年）一月には、消化器病の臨床研究と
独自の治療法を導入し、その発展に貢献した功績（意義のある大き
な働き）で文化功労者として表彰される。翌年には、岩手県人会顧
問、前沢名誉町民、さらに九大名誉教授となった。

そして、一九六八年（昭和四三年）、八六歳で他界した。直助の生涯
医学の道を貫き、消化器系の独創的な研究の実験は、いまなお高く
評価されている。

*参考文献

『岩手の先人 一〇〇人』 岩手日報社出版部編集 岩手日報社
小学校社会科副読本『わたしたちの奥州市』

